

卒業生のつどい ～高橋公子さんの講演より～

高橋さんは、秋田県身体障害者更生相談所のろうあ者相談員として聴覚障害の方々のためにご尽力してこられました。そんな高橋さんの生い立ちやこれまでの経験から感じたことを、さまざまなエピソードを交えながらお話していただく貴重な機会となりました。参加者のみなさんも、相槌を打ちながら、その時代の境遇を思い涙しながら、真摯に聞いておられました。要約したものを一部抜粋して掲載します。

幼少時代

もともと病気がちだったのですが、9歳の時に急性腎炎にかかりました。高熱を下げるためにストレプトマイシン（ストマイ）の注射をしました。そして、副作用のために聞こえなくなりました。なんとか治らないかと考え、東京の医者にかかるために父と上京しました。医者に聴力は戻らないと言われ、父はどんなにショックだったんだろうと思います。当時高価だった人形をねだると、かわいそうな子だと思ったのか、その人形を買ってくれました。私自身は幼かったので、一生聞こえないとはどういうことか考えたこともなくのほほんとした子どもでした。

ろうあ者相談員として見聞きしたこと、そして現在

あるろうあ者の話ですが、仕事仲間がろうあ者に「おーい」と叫んでも聞こえません。代わりに、健聴者は木片を投げます。頭や、体に投げられます。とても痛いのですが、それは体の痛みだけではありません。心にも傷がつきます。「私を仲間として見ていない。下に見ている。悔しい…。けれど我慢するしかない。」そう話していました。また、健聴者は電話ができますが、ろうあ者は具合が悪いときに連絡ができず、仕方なく黙って会社を休むことがあります。そうすると、「ろうあ者はなんにも連絡をよこさない、非常識だ。」と悪く思われることもありました。

しかし、今ではさまざまな道具が進歩しています。ろうあ者のためというわけではありませんが、携帯電話ができたことによって連絡がスムーズになりました。それから、社会のろうあ者に対する認識もかなり変わってきました。健聴者が「私も手話を覚えてろうあ者の人とコミュニケーションをとりたい。」と手話教室に通う人もたくさんいます。また、大会などの催し物があれば、県知事や市長が来て、挨拶の時に手話でお話をすることもあります。

支えられていることへの感謝

若い人に相談員の仕事を引き継ぎ、成長してもらいたいと考え、所長に相談員を辞めたいと申し出たのですが、結局2年続けることになりました。「仕事を辞めないでほしい。」と所長に言われたことは、自分の仕事が認められていると思い、嬉しかったです。辞める前にリウマチになりました。周りの人たちに本当にお世話になりました。だから、自分ができないことは遠慮しないで社会にお願いしよう、恥ずかしいことはないと思うようになりました。本当に支えられてありがたいという気持ちです。私の尊敬している人が、若い人にお話しています。お父さんお母さんを大切にしてください。なにかしてあげなさい。してあげることがないときでも、一日に2、3回は笑顔を見せてあげなさい。親は笑顔を見るのが一番嬉しいんだと。だから、私は笑顔でいたいと思っています。

ポジティブな思考

楽天的ということが大切だと思います。暗いことばかりを想像したり、心配したりするのではなく、苦しい状況の中でもいいことを見つけてそのことを考える、それが大事なのではないかと思います。ある方がこう言っていました。「もし、自分の頭が悪いと悩んでいる場合は、頭のいい人は頭がよすぎるためにいろいろと考えすぎて心配してしまう。その点、自分はいくらでも悩まないで済むと思うようにすればいい。」と。とにかく、いいところ明るい方向に向かって進んで行く、ということもいつも思っています。